

津輕水神考

小 館 衷 三

日本人は水に対する恩恵と恐怖を神格化して諸神仏に仮托して信仰という形をとつて来た。本稿では自然的・文化的背景のもとに、全国的水神をのべ、津輕の水神に及びたい。

一 全国的水神信仰

水は人類にとつて欠く事のできないものであるので世界各地で大切に扱われ、中国でも「水を治めるものは天下を治める」のことわざがある通りであるが、一言だけふれておく。

雩（う）と読み 雨乞、雨乞祭のこと。

左伝の桓公五に「竜（星名）を見て雩す」

とあつて、竜という仮空の動物の威力で雨を降らせることを信じていたことが知られる。

日本においても、水に対する信仰はあまりに多くてそれこそ枚挙にいとまがないが、少しのべよう。

まず、神代において、「天津罪」の中に「天津罪とは畔放、溝埋、樋放……」と八重罪のうち、三つが水―水稲耕作に關している。「海幸彦、山幸彦」の物語りも、竜宮―竜神―司水神關係である。

古代に入つては、万葉集卷二、相聞の部に

明日香清御原宮御宇天皇代（天武天皇）

天皇、藤原夫人に賜へる御歌一首

わが里に大雪降り大原の

古りにし里に降らまきは後

藤原夫人、和へ奉れる歌一首

わが岡に龍神に言ひて降らしめし

雪の摧し其処に散りけむ

がある。龍神とは本稿の中心をなす竜神で司水神の貴船、丹生川上社の祭神であるが、このように奈良朝から深く信じられていたようである。

また、現在京都市の神泉苑は平安初期、弘法大師が、善女竜王を請じて雨乞をした霊地とされてきたところである。

中世初頭の鎌倉將軍、右大臣実朝の

時によりすれば民のなげきなり

八大竜王雨やめ給へ（金槐集）

などは、八大竜王が司水神であることをはっきりあらわしている。

貴船、川上神がその中心であるほか、竜田（風神）・広瀬（風神）

・広田（風雨）・加茂（雷雨神）なども共に自然―気象の神とされている。

津輕においても、四代藩主信政は領内四社に（広田の代りに貴

船）これらを指定しているのもその影響といえよう。

これらは、京・大和を中心として発展したのでそこからのべよう。

日本文化の中心であった大和平野は瀬戸内気候区の東端を占めてい

て乾燥地帯で、現在でも溜池の数は数万、第二位の讃岐（香川県）を

はるかにはなしている。従って祈雨・止雨に対して古代から朝廷を中

心として諸神に祈願をこめており、都が京都に移り、律令制のもとに全国的支配がなされるようになって、風調雨順を祈願することは朝廷の中心的行事となり、為政者のもつとも心をつかったことは、今に残る諸神仏への祭祀祈願の記録・風習などによって知り得るところである。

論を進めるにあたつて、大和、京都の水神と津輕地方との一覽を掲げる。しかし、民間信仰の系統・分類は困難をきわめるものなので暫定的なものであることをこわつておく。

系	統	祭神	代	表	堂	社	津
貴船系		龍神	京都市	貴船社			十和田様
川上系上		高龍神	奈良県	吉野郡			
中		岡象女神	全				
下		閻龍神	全				
水分系		天水分神	奈良県	吉野山他			三岳神社
		国水分神	全				
四社系							領内四社
広瀬		若宇迦売命	奈良県	北葛城郡			
竜田		天御柱命	奈良県	生駒郡			
		国御柱命					
加茂（上）		別雷神	京都市	上京区			雷電宮
広田		天照荒御魂	西宮市	広田			
宗像系		市杵島姫	福岡県	宗像郡			
（三神）		田心姫	その他	（日本三弁天）			弁天様

住吉系	湍津姫	大阪府住吉区
(三神)	底筒男命	
中全		
四神)	表全	
表全		
海神系	底津綿津見命	長崎県上県郡
(三神)	中全	新潟県佐渡郡
表全		
金毘羅系	大物主命	香川県琴平町
竜神系	諸竜神	
不動系	不動明王	
稻荷系	宇迦乃売神	京都市伏見

○貴船神社、京都市左京区鞍馬貴船町

天武天皇の白鳳六年(六七七)に建てられたという古社、司水神として山城国の加茂川の上流貴船川畔に鎮座する祈雨・止雨の神として吉野の丹生川上神社と共に最も尊崇された。

嵯峨天皇弘仁九年(八一八)七月、炎旱甚しく、五穀色を変じたので、朝廷では幣帛・黒馬を献じて雨を祈り、同十年六月、霖雨が長く続いたので、幣帛と白馬を献じて晴を祈った。これから旱霖・雨水の際は必ずこの祈願がなされた。とくに二月九日の雨祈祭―雨乞祭には本社・奥宮・雨乞滝で、その年の降雨の適度であることと五穀豊饒を祈る。

滝壺では

おおみたのうるほふばかりせきかけて

みせきに落せ川上の神

の秘歌を唱えるという。

このように朝廷で崇敬したので全国的に広まり、三百余社の末社があり、後でのべるが津軽では十和田様の名で呼ばれている竜神様である。

○丹生川上神社 奈良県吉野郡

上社(高麗)・中社(岡象女)・下社(闇麗)の三社の総称で、いずれも吉野山をめぐって存在し、貴船と共に最も朝廷の崇敬の厚かった官幣大社の司水神である。

○大和水分四処

天の水分、国の水分神を祀り、大和では吉野・葛城・宇陀・都祁の四社がその代表で文武天皇二年(六九八)に馬を吉野の水分の峰に奉つて雨を祈ったとある。後世、みくまりをなまつて、御子守となり、子守神として有名になった。

この水分と川上社とが吉野山及び周辺にあるため、吉野山の本尊蔵王権現と吉野山自体の金の峰信仰などが一体化して信仰され、布教されたのか、蔵王信仰―御岳(三岳)―金峰―水神となっている例が少なく、さらに蔵王とかいて、キフネと仮名をつけている例も津軽にある。東北では宮城県の蔵王刈田嶺神社は天水分神・国水分神を祀り、もと水神社と称していたし、同じく宮城県本吉郡の三岳蛇王権現は佐沼御前ともいい水神である。青森県三戸郡西越の三岳神社も俗称蛇王権現といい、竜神を祀り、雨水の神である。

○ 竜神系

前述の龍とは竜神なのであるが、竜蛇信仰の例はあまりに多くて枚挙にいとまがないといつてよい。

代表の一例は、大和国の室生寺をあげよう。木津川上流の水源地として前記の諸神におとらず深く信仰され、周囲に五竜神が住み、国宝の五重塔の宝輪に封じ込められたというし、竜穴神社は祈雨・止雨の神社として名高い。

○ 宗像神社―弁天様

宗像三神は海・水神で竜宮の竜王・竜女であるが、同時に竜蛇を本体とする信仰の対象であつて、敷島・竹生島・江の島は日本の三弁天として名高い。伏見稲荷も水神系に数えられる。

○ 京畿以外のもの

全国的に無数といつてよいが、その代表のいくつかを。

北九州の宗像神社、四国の万能池の竜神・河童、有名になつて江戸から逆輸入された形の久留米の水天宮、北陸の白山は九頭竜川に結びつく竜蛇信仰であり、関東では榛名山の竜神、東北では月山―農業神―竜蛇、金華山の竜蔵権現―弁天信仰、秋田の太平山の大蛇信仰、岩手山の竜蛇、前述の宮城の蔵王刈田嶺水神……、仏教系でも、山形県の善宝寺の竜王・竜女、男鹿半島の大竜寺の竜王、岩手県浄法寺の天台寺弁天（桂清水）、田沢湖の辰子竜神、八郎潟の八郎竜神……。青森県では八戸の法領社のおがみ様、十和田市法量神社の竜神等である。

二 津軽の水神

津軽の水神に關しての記録は十和田湖の南宗坊竜神、岩木山の田光の竜女にしても古い物語りではあるが、史料としては江戸時代のものである。古い方から順次にのべると、

猿賀深沙大権現の祭神は田道の命といわれ、死後、墓を掘つたら大蛇であつたというし、農業神・水神としても扱われている（一般的には大般若經の守護神）。為信が男鹿沖で竜神の助で海難から逃がれた（一統志）という記事もある。

正法三丙戌年

惣社神主

元氣円満一靈感応 小野川遠江守

奉造立十湾山貴船宮精舎一字 水下安全之牧

性命成就神首加持 当宮祠官

四月十四日

盛田備前守

（新撰陸奥国誌 第二巻）

は南宗坊に十和田湖を追い出された八竜が鎮座した沖浦の青荷沢の十和田様の記録である。

津軽と糠部の堺、耕壇の岳に湖水有り、十湾の沼と云う也。地神五代より始る也。数か年に至つて大同二年斗賀の靈驗堂の衆徒南蔵坊と云う法師、八竜を追出し十湾の沼に入る。今天文十五年まで八百余歳に及び也。（津軽一統志）

などがあり、文化四年（一八〇七）に十和田湖をたずねた菅江真澄の紀行文（遊覽記 4 卷東洋文庫、平凡社刊）に

……杉林の下路をとおってゆくと堂がある。青竜大権現という額がかかっている。以下、散供をうつことなどが記録されている。

幕末の画人平尾魯仙の「谷の響」に

天保十四年（一八四三）卯、碇が関大落前の岸、くずれおちて水理を塞ぎ、水湛へてさながら沼の如くなりしに、土人、十和田と称して参詣する者多かり（津軽方言に、山中の窪凹に水を湛へて沼を成すもの、土人、十和田と云）。

があり、山中の水たまりを十和田様といつて竜神を祀る風習が江戸時代からあったことが知られる。

この代表的なものの一つに前述の棟札の沖浦の十和田宮があり、現在まで有名なのは大鰐町三ツ目内川の上流の十和田宮であろう。二者ともに山中であるため、遙拝所が設けられ、現在では、そこが本社になつてしまつてゐる。史料をあげると、

貴船神社 本村（三ツ目内）の南二里山中にあり、登坂一里祭神、海洋見神、水波乃女神

勧請の年月詳ならず、旧十和田宮と唱う。

（新撰陸奥国誌 第二巻）

前に大沼あり、三丁四方もあらんか、御手洗の池と唱う。祭日は毎年四月十九日（旧曆）、遠近の詣人、地辺につどいて米銭の参供（サング）を池水に捧打して、身の吉凶、年の豊作を占う。神驗あり。また池中に大なる枯木横たわり、枝ごとに白きすいもの如き物（実はクロサンショウオの卵）あり、俗に山神の御備へ餅と唱う。

（津軽道中譚、万延元年一八六〇）

とあつて、この地の人はもちろん、三ツ目内川一平川下流の人が毎年旧四月十九日に参詣に来て豊凶を占っている。

池を三つに区分し、早稲・中稲・晩稲がよいか、サンショウオの卵の多少で判断するらしい。近年、品種改良・農耕技術の進歩により豊凶に氣候が昔ほど影響されなくなつて、神仏に祈ることが忘れられつつあるが、終戦直後でも、「十和田様のモチコですじゃ」と三ツ目内の人から本當の餅をもらつて食べたし、調査に歩くと、六、七十歳の老人達からはみなこの十和田様に参詣した話をきかされる。

このほか、両社の川下などには十和田様あるいは雨乞する霊池が各地にあつて、信者が散供を打っている。

三 雨乞の神

東北の果、津軽でも水不足は大変で、昔はよく水喧嘩が行われた。一面、神仏に祈ることも盛んに行われ、江戸時代は藩をあげて祈禱などをしてゐるし、水神はもちろん各村々のうぶすな神などにも祈願をこめた。

その中で、前述の十和田様は当然であるがその他の霊地にも雨乞している。

雪に不浄を用う

飯詰村の山中に雨池というのがありて旱天の年は里人どもこの池の辺に葬送の道具及産室の不浄物を運び、あるいは牛馬の骸骨などを投げ入れ、草々けがらはしき業をなすに、忽ち大いに雨あることは往古よりしかりというて、雨池とよべりとなり。かかるからに、往ぬる嘉

永四の亥の年も又早ばつの災あるから村里の農夫共、此池の辺にむれつどい、種々のけがらはしきものを持ちくばりて雨乞の業を営みけるが、汚穢不淨の物をもて雨乞することは何れの国にもまゝ有ることながら極めてなすべき業にあらざる事なり。

また、相馬村の陣場沼は

舟打鉦山より約六キロ、陣場森の頂上にひょうたん形の沼あり、近くに小祠があつて竜神を祀る。旱の時この沼を桿にてかきまわすと雨が降る。数十年前までは全村あけて参加した。

の調査記録があり、西目屋村の沼頭（池）にわらで大きな蛇をつくり村人がかついで行き、行水をする。

同じ西目屋村の白沢の沼では、

老若男女が全裸で水流しながら、男女がわらのふんどしをして角力をとるなど、神様のいやがる行為をした。約六十年前まで行った。と教えてくれた。

以上、その他は事例をのべるいとまがないので、各種の名称の数をあげておくことにする。

十和田様（貴船社）	二九社
おかみ神（川上社）	一四社
竜神	四二社
海童神	二社
弁天様（胸肩社）	四九社
その他（七面様、水天宮）	五社

（昭和五十年末現在）

むすび

津軽の水神を調査し、その位置づけをするために全国的調査に着手したのはよいが、あまりにその資料が多く、かつ雑多なのに手をあげてしまった。それほど、水神信仰は一般的であるといえよう。津軽で云えば、どの堂社も祭神に關係なく雨乞いや晴天の祈願がなされる。従つて、津軽一円に、晴雨の信仰の網が張りめぐらされるようなものである。

そのことを調査の上からまとめてみると、東は十和田湖―浅瀬石川―沖浦の十和田宮―中野・十川の不動、南は平川―三ツ目内の十和田宮―阿闍羅（不動）・乳井の毘沙門（或は堂が平）・久渡寺の観音のトリオ、この浅瀬石川と平川の合流点近くに猿賀の水神が存在するし、西は岩木山（白竜の峰、田光の竜女）―岩木川―目屋の乳穂が滝（不動）、村市の毘沙門、桜庭の清水観音のトリオが成立しているのは、岩木川水系の水源地信仰になるのではないかと考えられる。いずれにしても今後一層の調査研究を必要とする民間信仰である。

終りにお国三十三所観音の札所は、もと飛竜権現を祭っていたところが三分の一もあり、これは多分、熊野の那智滝を神格化した飛竜権現であろう。いずれにしても水に關係の深いものであり、さらに、宝竜権現社も二十近くあるが、これに「こんびら」と仮名を振っている文書もあることから、やはり、水に關係の深い神仏であり、水虎（河童）系と共に今後の研究課題の一つであろう。